

# フィプロニル低感受性イネドロオイムシに対する育苗箱施用剤の防除効果

## 1 情報・成果の内容

### (1) 背景・目的

2014～2015年の調査により、イネドロオイムシに対するフィプロニル剤（商品名：プリンス）の効果低下事例が県山間部の一部地域において確認された。そこで、イネドロオイムシに対する効率的な防除対策を確立するため、本地域個体群のフィプロニルに対する感受性を確認するとともに、育苗箱施用剤の防除効果を検討した。

### (2) 情報・成果の要約

2014～2015年にフィプロニル低感受性イネドロオイムシの発生を鳥取県で初確認した。これらの低感受性個体群に対して、ジアミド系殺虫剤を含む育苗箱施用剤の移植当日処理は高い防除効果を示す。

## 2 試験成果の概要

(1) 2015～2016年に智頭町より採集したイネドロオイムシ成虫のフィプロニル局所施用による補正死虫率は、 $0.01\mu\text{g}/\text{頭}$ 及び $0.001\mu\text{g}/\text{頭}$ では0%、 $0.1\mu\text{g}/\text{頭}$ では80～90%であり、LD50値は $0.01\sim 0.1\mu\text{g}/\text{頭}$ と推定された。フィプロニル感受性個体群のLD50値は約 $0.0005\mu\text{g}/\text{頭}$ であることから、本個体群のフィプロニルに対する感受性は低下していた。

(2) ジアミド系殺虫剤のクロラントラニプロールまたはシアントラニプロールを含む育苗箱施用剤の移植当日処理は、フィプロニル低感受性イネドロオイムシに対して高い防除効果を示し、実用的な防除効果（防除価80）が移植後50～60日間持続した（図1、2）

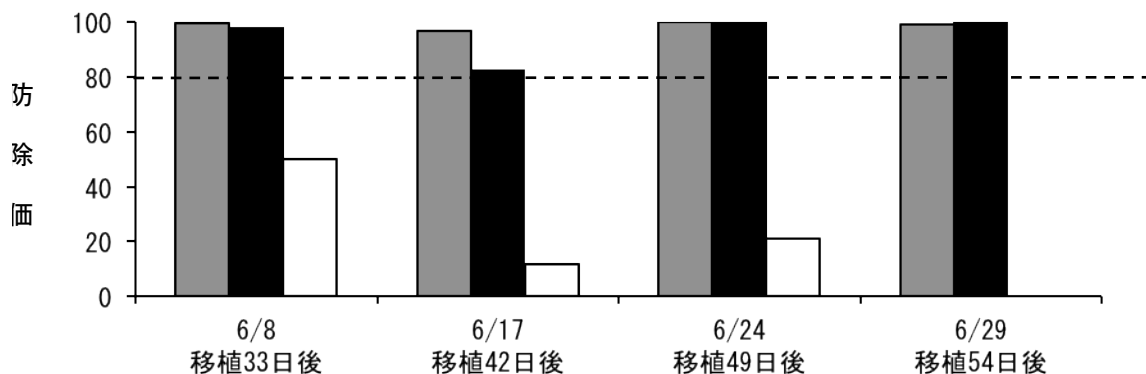


図1 フィプロニル低感受性イネドロオイムシ幼虫に対する育苗箱施用剤の防除効果

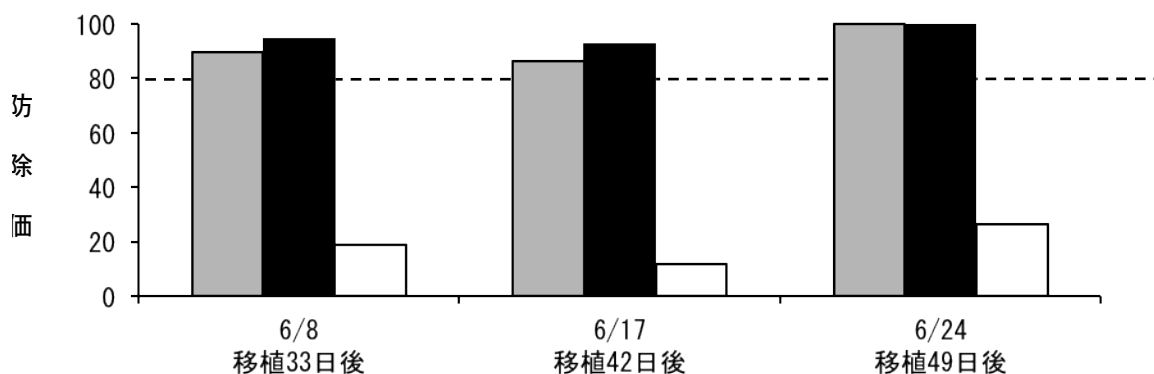


図2 フィプロニル低感受性イネドロオイムシに対する育苗箱施用剤の成虫及び幼虫の食害防除効果

※図1及び2の注釈

注1) グラフの凡例

○：クロラントラニプロールを含む育苗箱施用剤 (Dr. オリゼフェルテラ箱粒剤)

■：シアントラニプロールを含んだ育苗箱施用剤 (ルーチンデュオ箱粒剤)

□：フィプロニル剤を含んだ育苗箱施用剤 (Dr. オリゼプリンス粒剤10)

破線：防除価80を記した線

防除価 = (1 - (薬剤処理区の数値 / 無処理区の数値)) \* 100

注2) 耕種概要

試験場所：八頭郡智頭町口宇波、品種：コシヒカリ、移植日：平成28年5月6日

移植方法：稚苗機械移植、18.5箱/10a (18cm×30cm)

注3) 育苗箱施用剤の処理方法

移植当日、50g/箱を手まき散布した。

注4) 無処理区のエネドロオイムシ発生状況 多発生

### 3 利用上の留意点

(1) 本技術の普及対象はフィプロニル低感受性イネドロオイムシ発生地域とする。

(2) 2017年12月19日現在、ジアミド系殺虫剤を含む育苗箱施用剤として、Dr. オリゼフェルテラ箱粒剤 (プロバナゾール 24%、クロラントラニプロール 0.75%)、Dr. オリゼパディート箱粒剤 (プロバナゾール 24%、シアントラニプロール 0.75%) 等がある。イネドロオイムシの発生地域はイネいもち病の常発地と同一であることから、本病に対して高い効果を示す殺菌剤が混合されている薬剤を選択する。

(3) 薬量が不足すると防除効果が低下するので、規定量を均一に散布する。また、移植当日以前の薬剤処理については、各農薬の登録内容に従う。

### 4 試験担当者

〔 環境研究室 主任研究員 奥谷恭代  
研究員 福田侑記 〕